

## 幻は永遠に

西松 布咏

六月のある午後、新聞を開くと「幻の能@バチカン」の文字が目にとまった。

バチカン宮殿で宝生流と金剛流の合同公演が上演された能楽「復活のキリスト」は一九八四年以来の能楽公演だったとのこと。今から三十三年前のその公演は私の友人武藤都さんが金剛巖師の能楽をローマ法王（故ヨハネパウロ二世）にお見せしたいということがきっかけで実現した。彼女の情熱は多くの人々の心を動かし桑原武夫氏が実行委員長を引き受け、梅原毅、秋山ちえ子と言った多くの著名人が尽力し「日伊文化交流・東と西の出逢い」として法王城カステ



福原毅

ロガンドルフオに能舞台を設置し七月二十二日の夕暮れに新能のかたちで上演するに至った。最初からこの企画に関わっていた私は意を決して稽古を続けながらの写真スタジオ勤務を止めこのツアーに同行した。遠くの山々を借景とした舞台の前に篝火が灯されると、日本の古典芸術【羽衣】を初めてご覧になる法王は東と西の出逢いの中で共通な面と異なる面が何であるかを見出そうと異国を旅する若者のようだった。「人間は真理や美を求める心があれば民族、伝統、文化によって異なる哲学的、芸術的表現の相違を超えて一つになり得、芸術は常に目に見える次元を超えた何か神聖なものを表現し、より高い御方への祈りになりうると思います」と語って下さったその後のスピーチが今でも心に残っている。

この時の感動が迷っていた私を芸の道へと導き、今の私が在るのだ。法王を魅了した【羽衣】を演じた金剛巖師は今回参加した金剛龍謹さんの祖父に当たる。伝統は時を経てかたちを変えながらも新世代に受け継がれてゆくのだ、としばし感慨にふけた。

去る五月二十日に十年ぶりに【第五回虹の会】を復活させた。

初会はなんと三十年前：松岡正剛氏に色々相談しご協力戴き、これから三味線唄を虹色に染めてゆきたいと意気揚々の舟出だったが、年月をはるか経た今回は「伝統から未来へと次世代につながる虹の会」のコンセプトで構成した。

一部は、一筋に舞踊の道で閑雅な芸に至った花柳千壽文師と江戸と上方の伝統芸。二部は「伝統から未来へ」と再々演の【忍ばずの女】を若き宮



尾昌宏氏に脚本、演出を依頼し新たな作品として上演した。鷗外が「舞姫」を執筆した座敷に鷗外の亡霊を登場させたことからお玉の「忍ばずに生きたかりけり」の一途な女心ばかりでなく森鷗外の計り知れない苦悩の一生を「忍ぶ男」として描くに至りより深い作品になったような気がする。

同じ作品でも年月を重ね、角度を変え、繰り返してゆくと見えなかった部分が蘇り新たな可能性へと広がって行くかもしれない。そして現代に受け入れがたい三味線音楽が次世代へそして世界へと目に見える次元を超えて未来の架け橋になり得るかもしれない……と残された時間をどのように歩んでゆこうかと様々に想っていた今日この頃、「幻の能@パチカン」の文字は、はからずも忘れていた三十余年ぶりの過ぎし日々になつかしく誘ってくれた。

## 事はじめ

田島 かほる

平成十八年十一月都立大学駅前に、消化器内科を中心とした内科を開業し早十年。この地に右も左も解らずパラシュート落下し、自宅とクリニックとの往復の毎日だった私ですが、ちよつと余裕ができたのでしょうか、他のことにも興味が始まりました。長年離れていたゴルフも少しずつ練習を開始した頃、NHKの朝ドラで玉木宏さんが三味線の弾きがたりで唄っていた場面を見て、何とカッコイイのだろうと思った次第で、それも本人が弾いて唄っているというのだから、もうビックリポンでした。その同時期に、十年ぶりに参加しブービー賞だった医師会のゴルフコンペの帰りのバスの中で、ワインを飲みながら盛り上がっていたとき、稲生先生と永野先生が三味線の話をしているのが耳に入りました。



翌日稲生先生からメールが入り、「西松先生に直接連絡して下さい」とのこと。「ハッ！またやってしまった」。よく覚えていないのですが、酔った勢いで「私習いたかったんです」なんて言ってしまったのだらうなあと反省しましたが、後にも引けず西松先生に連絡いたしました。先生から「思い立ったら吉日」とお返事を頂き、そうかもと背中を押されるようにお稽古に通うようになりました。

最初の頃はいつまで続けられるか自信がなかったのですが、もう半年が過ぎようとしています。小唄は歌詞の内容が粋で江戸時代にタイムスリップしてみたい衝動に駆られます。家庭内では音痴で有名な私ですが、練習を重ねていくうちに少しずつ感じが掴めてきたところです。三味線はまず座った状態で三味線を固定するのが大変で、手首をこねるようにパチを使うのも難しく、また、糸の音合わせに何十分もかかり練習の前に疲れてし

まう有様で、いつになったらあの玉木宏さんのようになれるのだらうなどと図々しい空想を描いておりましたが、最近はまだどしくもなっちゃって三味線ですが弾けるようになってきております。

昨春秋の「美紗の会のつどい」には出演できませんでしたが、春の会はクリニックを休診にし参加させていただきました。着物は何十年ぶりで、組み合わせが解らず部屋中着物と帯と小物だらけにしてようやく組み合わせを決め本番当日。小唄より着物が着られることにワクワクし、四十四曲皆様の上手さに圧倒され、あつという間の一日でした。

練習は裏切らないと信じ、ゴルフと共に精進していくつもりです。いつか、玉木宏さんのように唄い弾ける日を夢見て。

## 浄心寺の桜と、談志師匠と、 本郷と、フランス人 和光貴俊

今年の東京の桜は、開花自体は早かったのだが、その後の寒の戻りもあって、満開までには少し時間がかかった。そんな訳で、二回目となった布詠師匠の浄心寺での「さくら結ひの会」当日も、桜は全体で八分程度の咲き具合。それでも、本堂に近い桜の木は、他の木に比べて、ありがたいお経を間近で聞いているせいかな、ほぼ満開で、我々を歓待してくれた。満開であっても、全く匂わない、というそっけなさがまた、この樹のいいところ。



開演まで少し時間があつたので、これ幸いと立川談志師匠のお墓参り。特に目立つ場所にこれ見よがしにそそり立つ訳でもなく、こちらもそつてなく、一般の皆さんに混ざって、しゃらつとお墓がある。墓石の左脇には戒名「立川雲黒斎家元勝手居士」。なるほど、「うんこくさい」か。シャレてるし、これを受けて立った浄心寺さんも偉い。そして、下段には談志師匠のイラスト

とともに「さあて、人生ねえ」という人を喰つたような科白がひとくたり。やっぱり、この人は死んでも粋だ。「だんしがしんだ」が回文になっているというのは晩年、ご本人が好んで口にしていたが、亡くなっても談志師匠は談志師匠なんだな、と嬉しくなった。

布詠師匠の演目は、「春霞」や、「にぎりえ」、「櫓のお七」、「野ざらし」など、季節と地所にちなんだ小唄、端唄、新内の数々。そういえば、「にぎりえ」の作者である樋口一葉が常日頃、御世話になっていたという「一葉の井戸」も、お七の生家である八百屋も本郷だったなあ、とつらつらと思ひ出す。私自身も、中学の三年間と、大学の二年間、本郷の地で過ごし、なんともえにしを感じるこのエリア。それでも、布詠師匠のこの会がなければ、きつと浄心寺の見事な桜のことも知らずに、足が遠のいたままだっただろう、とまた、ご縁に感謝。

会が終わって、夜桜を眺めながら、おいしいお弁当をつつき、一杯、ひっかけていると、布詠師匠から、「あなた、商社でニューヨークにいたんだから、英語、できるでしょ、ちよつと通訳してちょうだい」とのお達し。首根っこをつまむように連れていかれた先には、人のよさそうな外国人の男性二人連れ。聞けば、フランスからの日本旅行中で、知人の日本人女性（布詠師匠とも、コラボレーションされたことのある詩人で研究者でもある小野原教子さん）からの「その時分、日本にいるなら、是非、行ったほうがいい」という太鼓判で、訳も判らずに来てみた、と。なんだ、布詠師匠、相手はフランス人じゃないの、私、フランス語はちんぷんかんぷんですよ、とボヤきながら、

お互い、慣れない英語でやりとり。でも、お二人とも、とても楽しんだとのこと、聞けば、うち、お一人はフランスで香り師のお仕事の由。常に感覚を研ぎ澄ますことが求められる人たちは、使う五感が異なっている、どこか、通じ合えるのだな、と羨ましく。師匠から「荷物になるでしょうけど、お土産に」と、DVDをプレゼント。お二人とも大喜びだったが、私は、「荷物になるでしょうけど」を直訳してしまい、果たして、これ、英語で伝わったかしら、と不安な思い。でも、想いもよらない国際交流が出来ました。

布詠師匠、また、「季節」や「はかなさ」そして、「日本」を感じる刹那を求めて、小唄の会に参上いたします。

## さくら、らくご、江戸の唄

川崎 隆章

四月一日午後三時半、会場は浄土宗浄心寺。第二回「さくら結びの会」は「さくらに寄せる江戸唄と落語」という趣向。落語は春風亭正朝師匠、唄と三味線は西松布詠師匠。

会場は桜で有名なお寺の本堂であり、だれもが、満開の桜に囲まれた花見風情の会を期待した。ところが、この日はみぞれまじりになるうかという寒さで、折角の桜も堂内からガラス越しに眺めざるを得なかった。しかし、静かな雨が絹のように細くふりそそぎ、ほんわりと霞んだ境内や墓所の桜は、奥山に隠れた山桜の里を想わせるような風情があつた。

花見の風景といえば「染井吉野にドンちゃん騒ぎ」がステレオタイプだが、染井吉野が主流になったのはここ百年の話で、江戸時代はもつというんな桜が咲いていたという。

どこにいても咲いている染井吉野に思うところがある。まもなく中学校や高校で邦楽器の授業がおこなわれるというが、そうなると花見の会場で、学校で習った「染井吉野みたいな邦楽」が鳴らされるのではないだろうか。演奏人口は増えるのはいいことだが、「特定の師匠やカタを持たない音楽」が増えて、邦楽が一様化するのではないかと心配する。

弾き方から生き方まで全部を叱ってくれるのが「師匠」のありがたみで、そうして受け継がれる「一対一でしか生まれない何か」が邦楽の多様性を担保してきた。美紗の会においては、布詠師匠が「一対一の稽古」にこだわって下さるおかげで「師匠から受け継いだもの、プラス、自分と師匠だけが体験する固有の何か」を身に着けることができる。もちろん、大勢の人々がセーノで揃って同じものを、弾き唄うのは愉快な体験には違いないだろう。しかしその一方で、山蔭にぼつんと咲く山桜や、愛嬌の良さが売り物の八重桜のよさを表現できる人を育ててこそ邦楽教育ではないかと思う。

話が横道にそれてしまった。

当日は、布詠師匠の江戸唄といい、春風亭正朝師匠の「野ざらし」といい、桎目と板目の描き分けが美しかった。邦楽や落語に限らず、近年は評判のいい演出や売り出し方に集約する「エリート化」がすすんでいるが、そんな中で、桎



杉全 泰

目と板目、あるいは古木の味わいと若木の勢いと兼ね備える両師匠の「多様性・多面性」は、まさに山桜や八重桜に光を当てる希望の光だと思う。やはり染井吉野一色の春では唄も恋も生まれない。

国の花とはいえ、染井吉野だけで語られる「桜の国」ではさびしい。三百を超える多様性で語られる「山桜の国」にこそ未来をゆだねたい。そして、山桜の芸に触れることで、時代、国籍、ジャンル、

芸種を超えた多様な命を得たい。

この日、花見のお弁当を頂いたあと、隣席のキクヤ君と二人で白山に流れ、紫煙を燦らせながら夜中まで居酒屋で盛り上がった。

酔って歩く帰り道、道端に転がっていた野ざらしの骸骨が「メメント・モリ（いつも死を思へ）」とつぶやきかけてきた。私は「ゆえに今日一日の命を頂きにライブに来た」と答えた。いろんな花、いろんな芸、いろんな命を味わいたいと思った春の夕べでありました。

## 唄と踊りに宿る

宮尾 昌宏

【虹の会】の『忍ばずの女』で演出と出演を務めさせて頂いたことは、本当に得難い経験でした。西松布詠さんから今回のお話を頂いたのは、今年の二月頃で、当初は戸惑いと不安が大きかった。というのも僕はそれまで現代劇の演出を手がけたことはあるものの、三味線や日本舞踊を自身の作品の中で扱った経験が皆無だったので、それらとどのように与したらいいか見当がつかなかったからである。しかし、布詠さんからの依頼は素直に嬉しかったし、何か面白くなりそうな予感がする、という勢いと勘だけで引き受けさせて頂いた。そして振り返ってみれば、その勘は正しかった。

今回『忍ばずの女』の創作が決まった時から、舞姫の間という場所だからこそできる事をしようと考え、布詠さんとも様々に意見を交わした。



前川 充

打合せでは、毎回必ず何らかの進展があつて、決して行き詰まる事がなかった事が印象深かった。お互いの意見を汲み取りながらも妥協などはせず、常に前へと進むことができた。その結果、鵜外の亡霊を登場させるというコンセプトに思い至り、さらに鵜外自身が生前に抱えていた葛藤と、『雁』の登場人物が抱えている葛藤に共通点を見出し、鵜外自身が記した言葉を発するというアイディアに至ることが出来た。

鵜外がもし今舞姫の間を訪れたら、何を感じるだろうか。そこで、布咏さんの三味線と千寿文先生の踊りと出会ったら：唄と踊りが語りかけてくるような気がする、私の選択は正しかったのだろうか。お玉の生きた時代とは大きく変わった現代に生きる唄い手と踊り手によって、お玉が蘇り語りかけてくる。今という時代と鵜外の生きた時代、人の生き方も価値観も変わったけれど、時空を超えて鵜外の魂に響く唄と踊りだった。

布咏さんという唄い手はとても真摯な唄い手だが、僕は特に「女性」に対する非常に強い眼差しを感じる。今回のお玉にしても、先日芳町亭よし梅で上演された『にぎりえの世界』のお力にしても、懸命に生きた女性への深い愛情を持って唄われる。もちろんそれはフェミニズム的な狭量なものではなくて、その愛情はもっと大きな、人間そのものへ向かっている。それがあつてこそ成り立った今回の上演だったと感じています。

しかし、今また上演を振り返ってみると、鵜外の亡霊と今現在を生きる私達の間でもう少し対話のようなものが生まれる可能性もあったかもしれない、さらに発展する可能性が、と欲が尽きないのでまた布咏さんとも話をしたい。

三味線音楽の最大の魅力は間の表現で、それは現代耳にする音楽ではなかなか感ずることができないものだ。僕も布咏さんに出会わなければ、その魅力に着目することもなく過ぎていたのだと思う。何もない間に豊かさがあるというのは、なんと不思議で美しいことで、舞台芸術に携わる者としてその感覚はこれから更に大切にしていきたいと思っている。二〇一三年の『月虹楽衣舞』

で出会ってから、僕に三味線音楽の魅力を少しずつ伝えてくださった布咏さんには改めてお礼を、そしてまたご一緒できることを心から楽しみに。

## 「虹の会」

己紗 秋咏

忘れられないドラマの一場面がある。田中裕子主演の向田邦子ドラマだった。家族を支え頑ななまでに自らを律して生きてきた主人公が、ある夜、意を決し心の底で慕い続けた男のもとへ向かう。宿の小さな部屋に立ち尽くす二人。男の肩に手を置き、男の顔を真っ直ぐに見つめたまま女は足袋を脱ぐ。そこへ男を呼ぶ声。二・二六事件の決起へと促す仲間の将校の声だった。背を向け去っていく男を見つめ続ける女の表情が脳裏に焼き付いて離れない。

すごい舞台だった。五月二十日、「虹の会」第二部。会場は池之端にある「水月ホテル鵜外荘」。明治の文豪森鴎外の旧居で、彼の作品「雁」をもとにした「忍ばずの女」は上演された。千壽文先生の舞、布咏先生の演奏、演出の宮尾さんも、お玉が思いを寄せる東大生岡田（鵜外）となつて舞台上に登場した。

お玉の切ない思いは、皮肉にもお玉が決心をしたその日、他ならぬ岡田の投げた石礫が雁に命中するという予期せぬ偶然によって無残に砕かれてしまった。でも、と思う。あのお玉ならば、岡田への思いを心の底に沈めながら、その運命



を引き受けて自らの人生を生き抜いたはずだ。では、岡田は、鵬外は、男はどうだったのか…

残る余韻の中で、そんなことを考えたのは、実は幾日も経ってからのこと。舞台を観たそのとき、私は何も考えていなかった。考える余裕などなかった。引き込まれ、その世界にすっぽり入り込んで、お玉と一緒に（お玉になって）泣き、笑い、戸惑っていた。

千壽文先生が舞う。私の身体と心が反応し様々な感情が湧き起こる。そこに布詠先生の唄。その声に共鳴するように自分の中の感情が渦を巻く。胸締め付けられる切ない思い、諦め、激しい感情の高まり…

初めて千壽文先生の舞を観た友人が言った。「日本舞踊を見くびっていたわ」…そう。

日本舞踊や邦楽、人々が長きにわたって伝えてきたものの力はすごい。いや、本当にすごいのは、このお二人。

千壽文先生と布詠先生の至芸が惜しげもなく披露された第一部も、圧巻だった。「七福神」に始まり、「髪結新三」「松魚売勇商人」「五月雨に池」「卯の花」「宇治茶・富士の裾野」「いざや」次々に上演される曲は小唄あり富本節あり上方唄あり。千壽文先生は男になり女になり、布袋さんから鮮やかに弁財天に変わり、江戸の粋な踊りがあったかと思うと上方のはんなりした舞もあり…こんなにも色々な種類の唄や舞踊を同時に味わえる舞台なんて、そうそうない。しかもそのひとつひとつの完成度が半端じゃない。年二回ある私たちのおさらい会の最後の演目は、いつも布詠先生の演奏に千壽文先生の舞。

お二人を身近で見続けてきた贅沢と幸せを改めて思う。次のおさらい会は十月末。そのときが、今から待ち遠しい。



前川 充

## 濁り江に吹く風

長田 紀久子

西松布詠師匠の唄は江戸の風を呼ぶ。

例えばCD「CRESCENT MOON BLUES」を聴かれた方には同感していただけたと思うが、一曲目「縁かいな」など、まず三味の音が呼吸よりもゆったりしたテンポで、テ・ドン・ツン・ツーン・ツと響きながら時空を形作って行く。そこに魂の奥の深みから滑り出したような師匠の声が「夏の涼みは両国の…」と乗って流れるのだ。するとなんだか江戸の風が吹き渡ってくる。

二〇一七年六月一七日、人形町の数寄屋風日本家屋「よし梅芳町亭」にて、布詠師匠の江戸唄と奥山眞佐子さんのひとり芝居で「にぎりえ」の世界が綴られることになった。

二四歳にして病死した樋口一葉が、その前年、父親の七回忌法要費用捻出のため出版社に借金し、その借金の形として書き上げた作品だ。未だ江戸の気風を残す時代、二三歳の堅気の女性が著したとは、とうてい思われない作品。花街の女性への温かくも透徹した眼差しには共感せずにはいられない。

「濁り江」に降り立ったものの、釣り糸に足が絡まり、狂ったようにもがいている白鷺に似た主人公お力は、一葉その人の姿も映し出している。

今回の「にぎりえ」は本当に楽しみだった。

「お二階でお手が鳴る お酒だよ あいあい」布詠師匠の唄が始まり、程なくして、奥の小部屋



から座敷へと、素足に粋な着物を纏った女性が飛び込んできた。眼前一メートルにも満たない距離のその存在は生々しく、エネルギーで、私の目は釘付けになる。と同時に、江戸の風が引いたのがわかった。どうしてだろう。また風が戻って来ないかなあ。

福原毅



福原毅

会場は、戦前に待合として使われていたという座敷。当時の大工・職人の優れた技術水準がしのばれる繊細で行き届いた造作の建物だ。微かな音、ちよつとした動きが思いのほか気になる。そうか、動きが大きく、声も張り上げる「ひとり芝居」は、照明等が備わった舞台やホールでこそ生きる芸能なのかもしれないと思った。

この座敷は、端唄・小唄の弾き歌いや地唄舞の記憶を持つているに違いないという気もした。あちらの四畳半は爪弾きで決まりだ。三味線を撥で鳴らしたら、恐らく煩くてしようがない。シャンソンを習っていた頃のことも思い出した。歌いながら気分に任せて腕を広げたり上げたりして、特に声が出にくい箇所ともなると、声を絞り出すように激しく手を動かしていたっけ。先生は何もおっしゃらなかったけれど、おかしい格好だったなあ。

座敷では、指の動き、目線の動きに引き付けられる。本当の心の色もよくわかる気がする。

これはマズイ。秋に控える発表会のこと脳裏に浮かぶと、ひそかに冷や汗が流れ出した。

## 朋咏さんを偲ぶ

己紗洋咏

自然を師として生きている私は、文明の利器に弱い上に老化が進み長時間の移動が辛くて、江戸が遠く感じるこの頃……久々の稽古で電車に乗り、膝をさすりながらふと朋咏さんの膝も痛くて会を休まれているのかな等と想いをめぐらせました。その日は五月十日。稽古を終え、真つ先に知りたかったのは朋咏さんの近況でした。その時師匠の「あなたに話さなければならぬ事があるの」という沈んだ声に一瞬緊張した私は「朋咏さんの死」を告げられてショックのあまり声も出ませんでした。

何故？膝の痛みに至るまでの病気の経緯を知

るにつけ、最近あまりに話す機会が無さ過ぎた事を後悔しました。思えば東京プリンスホテルでの美紗の会第五十回記念演奏会の時、二次会の出席者が少なく寂しい限りでしたが、朋咏さんがご主人といらして救われた思いでした。その時ゆっくりと話したかったのですが、皆疲れ果て早めの解散となりました。あの日も体調が悪かったのでしょうか。忘れられない一日でした。

朋咏さんを想う時、いつも「美紗の会」の歴史を想うことになります。朋咏さんは師匠を頂点に「美紗の会」を立ち上げ、支え続ける重要な方々の一人です。美紗の会は、歴代の会長や御学友、そして母上を初めとするご家族や周りのファンが一体となって支える何とも言えない暖かい会になって行きました。振り返れば、三味の音が好き、でも唄は苦手という私が師匠の糸と唄と人柄に接して、即入門し「美紗の会」につどう方々の魅力と優しさに触れ居心地よく過ごしているうちに二十六年にもなり、今の私があると想うと感謝あるのみです。

私が入会した時、朋咏さんは既に唄も糸も素晴らしく完成され近寄りがない存在でした。本業の建築はもちろんのこと趣味のすべてがプロ並みの腕前で遠くから尊敬の念を抱いていました。一門の演奏会や宴会で隣に坐ると話題が豊富で茶目っ気あふれる可愛らしいお人柄でした。特に旅行で一緒した大山での一泊演奏会、岐阜の粋艶会、軽井沢の薊の会などの写真を眺めていると楽しかった思い出が蘇り心が和みます。



心残りなのは、今年こそ千葉の別荘に伺い、楽しい演奏会を開きましょうという夢が果たせなかったことです。

朋咏さんが「美紗の会」の今後のことを心配しつつ四月二十八日に逝かれたと聞き、私は五年前の神田明神でのお名取式に会長として参列して下さったことなどの様々なご恩を忘れずに、「これから微力ながら会を支えてゆくつもりです」と空を見上げて朋咏さんに語りかけている今日このごろです。



## 《今後の予定》

◎九月二日(土) 十五時より

軽井沢 鶴間邸

第八回薊の会 江戸の風情を映す粋な唄

演奏 西松布咏・美紗の会の仲間たち

映像 杉原武弘・福岡俊弘・高橋幸治

◎十月二十日(金) 二十一日(土) 十六時半より

野沢 龍雲寺

アジール・逃げる女の幻想譚

映画・音楽・ダンス・演劇

脚本・演出・映像・音響・照明 飯名尚人

唄・三味線・語り 西松布咏

振付・ダンス 寺田みさこ

出演 今村達紀

中西レモン

◎十月二十八日(土) 十二時半より

第五十四回 美紗の会のつどい

赤坂クラブ

◎十一月十一日(土) 第一部 十三時半より

第二部 十七時より

人形町 よし梅芳町亭

上方の粋 月想ふ舞と色そゆる唄と

上方舞 山村若静紀

上方唄 西松布咏

## ■たより 第85号

発行者 美紗の会

編集責任者 大久保 朋子

デザイン 近藤 幹則

■美紗の会

主宰 西松 布咏

稽古場 港区白金台三・二・二

白金台プレイス三階

電話 (三三四一) 一七二六

(五四四七) 一四二二

E-mail: nfue@solei.ocn.ne.jp

URL: <http://www.misanokai.com/>

